
公爵令嬢の密やかで大胆な野望

イタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

公爵令嬢の密やかで大胆な野望

【Nコード】

N6494S

【作者名】

イタ

【あらすじ】

ノーズブライト国の公爵令嬢レイラ・ディ・キルウエスト。王位継承者の婚約者で未来の王妃の座が約束されていた彼女だが、彼女には密やかな野望があった。

「謀計姦計はびこる城暮らしなんて絶対にいや！」

脱・貴族、目指せ一般庶民という野望。

自らの野望のため四苦八苦する彼女に、幸せな未来はやっているのか？

＊＊恋愛要素は薄めです＊＊

野望への第一歩

「どうして…、本当なの？ 本当にお姉様が…」

目の前にいる、正に傾国の美女然とした女性が驚愕に目を見開いている。彼女は私の妹だ。今は、まだ。

「ルイーズ。信じられないかもしれないが、これは事実だ。あいつが手にしているリボンが何なのか、わかるだろう?!」

彼女の左横で、今にも倒れそうな彼女の身体を支えている金髪碧眼の美丈夫が叫ぶ。その目は私を射殺さんとする程の鋭さを湛え、こちらに向けている。彼はこの国の王位継承権第一位を持つオーウェン殿下。私の婚約者だ。今は、まだ。

「そのリボンが何よりの証拠、だな。レイラ、まさか今更言い逃れできるとは、さすがに思っていないと思うが、一応証拠としてそのリボンをこちらに」

いつもどおり良く回る口、だけでも今は低い温度で言葉を吐いている。私と話すときはいつも表情豊かで端正な顔からは、冷たい怒気が伝わってくる。この若くして宰相となった男が、こんなにも怒っているところをはじめてみた。最近では常に冷静で、その腹の内は彼の髪や目と同じく真っ黒で、何事にも動じないと思っていたのだけれど。どうやら我が麗しの妹御がからむとそうでもないらしい。今更な発見である。ちょっと怖い。

私は無言で肩をすくめ、宰相殿の言うがままにリボンを手渡す。そのリボンは白い絹でできた、非常に美しいものだった。数刻前まで

は。今となっては泥で汚され、その大部分が醜く茶色に染まってしまうている。

（このリボンに、手を出す気はなかったのだけど…）

目の前の悲壮な表情の妹を見て思う。このリボンが、彼女にとってどれだけ大事だったのか、私は知っている。公爵家の娘である私たちにとって、このようなりボンはいくらでも代えのきく代物だが、彼女にとってはこれが唯一無二の宝物だったのだ。私の婚約者でもあり、彼女の幼いころからずっと続いている初恋の相手である殿下からの、大切な贈り物。

いままで彼女を傷つける行為を沢山してきたけれど、これが汚れるような、汚されるような事はないように気をつけていたのに。それが、このような結果になってしまい、本当に心苦しい。これは完全に私の手落ちだ。

ともすれば、後悔の念が表情に出そうになる。が、耐えねばならない。何のために、ここまでやってきたのかを今一度思いだし、最後の気合を入れる。

「あら、ついにばれちゃったのね。ごめんねルイーズ」

昔はよく無愛想といわれたこの顔に、いまは醜く歪んだ笑顔を意識して浮かべる。

「私、貴女に悪いと思ってたのよ、ずっと。でも、我慢できなかったの。どうしても、貴女をいじめたくなっちゃの、止められなかったわ」

それはもう、今時下町の芝居小屋でもお見かけしないような、典型

的な意地悪で性格の悪い女がそこにはいた。

表情は笑顔だが、底意地の悪さが浮かんでいるような笑みであり、醜悪に見せている。声も同様に、猫を被っているのが、政治的駆け引きで目と耳の肥えた目の前の男性二人にはわかるだろう。

「それで？オーウェン殿下はどうなさるおつもりかしら。婚約解消でもなさる？あら、でも、仮に私と婚約解消したところで」

チラッとルイーズをみる。

「その子と結婚できるのかしら。お父様がお認めになるのかしらねえ？」

そこまで言い切って、鼻で笑うしぐさを入れる。

我ながら性悪女然としている。こんな女とは友達には絶対なりたくない。私が男性なら、恋人にも、婚約者にも、まして未来の王妃などには絶対にしたくない。

「お姉さまっ！どうして…どうしてこのようなこと…。今までのことも、全てお姉さまが…？私は、信じられません。あんなに優しかったお姉様が、どうしてっ」

涙を浮かべるルイーズ。ごめんね、ルイーズ。本当に、本当に、貴女を泣かせたくはなかったんだけど。

「レイラ。今までお前は、お前の父上であるキルウェスト公爵の愛情を盾に、ルイーズに様々な嫌がらせをしてきたな。何度も、何度も、時にはその権力を盾にお前の取り巻き連中を使い」

いやいや、あの娘たちは勝手に動いてたんですよ。しかも私より数段ひどい嫌がらせをしようとしていたものだから（モノを盗んだり、

ルイーズの通り道に動物の死骸を置いたり、未然に防いだり、事後処理やフォローが大変だったわ。

それに、お父様の愛情、ねえ。まあ、私とお父様以外の人には、そんな風に見えているのもわかっていたけれど。

「しかし、残念だったな。お前の行動について、既に何名もの侍女や女中の証言が上がっている」

はいはい。彼女たち、うまいこと目撃してくれたみたいね。わざわざ彼女たちの行動パターンを洗って、私の嫌がらせ現場を見せ付けるのには苦労したものよ。

「昨夜、私とオーウェンで公爵に侍女たちの証言を突きつけてきた。これまでのお前の行為とその証拠を。最初は信じられない様子だったが、このところのルイーズの塞ぎようと、お前の本音を、どこかで感じられていたんだろうな。今朝方、ついに認められた。お前を殿下の婚約者から外し、ルイーズを正式な婚約者とするのを」
！お父様、ようやく決断されたのね。よかった。

内心はどうあれ、私の表情は、有り得ない事態に驚愕し、目が見開かれているように見えているはず。あのお父様が、国内でも長女レイラへの溺愛振りが有名なキルウェスト公爵が、その長女を未来の王妃の座から引き摺り下ろした事が、信じられないと言った表情にうん、昔を思えば私の表情もほんと豊かになったわ。

：でも、これだけでは足りない。まだ、これだけでは、私の野望はかなったことにはならない。

「そして」

きた。

「新たな王妃候補、ルイーズ・ディ・キルウェスト様へのこれまでの嫌がらせ：具体的には器物破損、盗難、および精神的暴力、だな。そのあたりの事全ての行いに対しての責任として、レイラ・ディ・キルウェストをキルウェスト公爵家の籍から外し、傍系のコール子爵家へ養女に出すこと。」

また、向こう3年間は王城への登城を認めないこと。：これは父親としてではなく、コール子爵家の上役、キルウェスト公爵家の長としてのご命令だそうだ。あしからず」

宰相殿は相変わらず冷たい視線をこちらに向けて、言い放った。

王妃候補の取り止め、キルウェスト家からの勘当と下っ端貴族への養女出し、登城3年間の禁止、かあ。欲を言えば貴族社会からの完全な締め出しが良かったのだけど、まあいいわ。さすがに公爵家の娘をいきなり庶民に落とすなんて、そこまで思い切ったことをあのお家大事のお父様にできるとは思っていなかったから。いざというときはまた私を公爵家に戻すつもりかしら？ おおいやだ。それまでに逃げ切らないと…。

まあでも、不服がないと言えば嘘になるけど、レイラの王妃候補繰り上げが即決まっただけよしとする。

目の前の三人の様子はといえば。

殿下と宰相殿の言葉に、ルイーズは言葉も出ないようだ。呆然と、私と、殿下と、宰相殿を順番に見ている。うーん、念願かなって殿下の婚約者になったのだから、ちよっとくらい嬉しそうな表情を見たいものだけど。この子に面と向かってあうのもこれで最後になるだろうし…。う、ダメ、泣けてくる。まだダメよ、耐えるのよレイラ！ 大体、ここで喜べるような強かな妹だったなら、私もここまで苦労しなかったでしょ！

ルイーズから気をそらせるために殿下をみると、鬼の首を取ったような顔をしてこちらを見ている。『どうだ、まいったか！』と言わ

んばかりだ。うーん、これでも9年間婚約者としてやってきたんだけど、どうも悲しいとか薄情者！とかって感情は浮かんでこない。ま、9年間のうち半分、彼が別の女の子を思っていたのを知っているし、私だって彼に恋愛感情をこれっぽっちも持っていないのだから仕方ない。

宰相殿は、うん。やはり冷たい怒気が漂っている。昔から怒ると怖かったけど、今日は今までの比じゃないわ。いやよね、男のねちっこい怒り方って。まあこれも仕方ないかしら。何と言っても仲良しだと思っていた幼馴染の姉妹が、実は姉が妹をこれでもかといじめていたんだものねえ。しかも妹は絶世の美女。そりゃ怒るわよね。私が貴方でも怒るわ。とういうか、ルイーズを私以外が例え嘘でもいじめてたとしたら、怒るどころの話じゃないわよ。地獄を見せるわよ、ほんと。に、しても、宰相殿の視線が怖い。ほんとにまつすぐこちらを見据えてくる。そんなにルイーズを可愛がってたとは知らなかったけど（気持ちわかるけど）、もういいじゃない。もうすぐ、全て終わるのだから。

さて、レイラ。あなた、ようやくここまで来たのよ。最後の最後まで、ビシッと、かっこよく、決めるのよ！

「う…嘘よ！！お父様が私を見捨てるなんてっ！嘘よ、嘘にきまっているわ！！そ、それにコール子爵家？養女？笑わせないでよ！私は、レイラ・ディ・キルウエスト！キルウエスト公爵家の娘なのよ。おとおおお！！！！」

…まあ、かっこよく、っていうのはともかく。とてつもなく情けない台詞、って言うのはともかく。

この瞬間、私、レイラ・ディ・キルウエストの19年間の公爵令嬢生活はようやく幕を閉じ、新たな人生への第一歩を踏み出したのである。

長
か
っ
た
！

野望はいかにして生まれたか―婚約者1―

私はレイラ・ディ・キルウエストとしてノーズブライト王国の公爵家、キルウエスト家長女として生まれた。

そこそこ整った顔の父と、結構な美女だった母の娘としては、まあ母親似のそこそこよい顔で生まれた。といっても母のように終始美しい笑顔を浮かべることはなく、とある人生の転換期までは、大よその人に対して無愛想と呼ばれる表情を浮かべていたのだけれど。そして私に遅れること2年、妹のルーズが生まれた。そこそこ整った顔の父と、結構な美女だった母の娘としては、出来過ぎなほど愛らしい、将来は傾国の美女と呼ばれる妹であった。私と違っていつも愛らしい笑顔でいる（笑顔でない表情も愛らしい）、すばらしい妹だ。

そんなわけで、私の生家キルウエスト公爵家は、そこそこ整った顔の父と、結構な美女の母、それなりだけど無愛想な私と、群を抜いて可愛らしい妹で形成されている。

…形成されていた。

母は私が5歳の時、風邪をこじらせてなくなった。最後は苦しむ様に、あのいつも美しい描いを浮かべていた顔をゆがませて亡くなったのをよく覚えている。それ以来、ルーズは以前にもまして私に懐いてきた。

とある理由から、父はルーズに辛く当たることが多かったので、余計に私はルーズに優しくしていたのだが、それも彼女が私をよく慕うようになった要因だと思う。

そんな我がキルウエスト公爵家だが、この国には他に2つの公爵家を持つ。その中でもっとも古い歴史をもつのが当公爵家だ。それも

そのはず、始祖は初代国王の弟で、開国の際、王が己の支配を確固たるものにするため、自身の弟を高位貴族に添えたの事がキルウェスト家の始まりなのだ。

当公爵家は”血の公爵家”であり血統以外これといって特色はない。翻って他の2公爵家は、知力については他の追隨を許さないイースター公爵家と、武力では負け知らずのサウズスト家である。

血統、知力、武力と、まあバランスが良いと言えそう見える3公爵家だ。

さて。連綿と続く歴史の中で、王家とキルウェスト家の血のつながりも薄れて久しい昨今。私が10歳の誕生日を迎えたその日、現当主であるお父様は私にこう告げた。

『お前は将来、この国の王妃となるのだ』

つまりは私、レイラ・ディ・キルウェストがノーズブライト国第一位王位継承者であるオーウェン・フォン・ノーズブライト王子の婚約者となったという話だ。

こうなるまでには、私の知らないところでいろいろな駆け引きがあったらしいが、結果的にお父様の権力への渴望が勝利を収め、時期王妃の座を自分の娘に射止めさせたわけだ。

他の2公爵家とくらべいまいち特技のないキルウェスト家としては、王妃を輩出することで権力の地盤を固めなおしたい、と言ったところであろう。また当代、他の2公爵家には娘がいなかったため、お父様にとっては絶好のチャンスだったのだ。

王妃候補となる以前から、私は王城で作法や歴史の勉強を王子と一緒に受けていた。といっても二人きりではなく、妹のルイーズ、イ

ースター公爵家の次男のラウル、サウズスト公爵家長男のアズの5人が生徒として、そしてなんと教育係として宰相殿も一緒にすごしていた。

といっても宰相殿は教育係と言う役のお目付け役のようなもので、専門の先生は別いたし、少しわからないところがあると宰相殿に聞いていたり、授業を（なかばむりやり）抜け出して遊んだりしていた。

宰相殿だけちょっと年が離れていたが、私たち6人は幼馴染のようなものである。

大人たちからしてみれば、将来確実に国の中枢部に食い込むメンバーを幼少期から一緒に過ごさせることで、将来よからぬ企みが起るのを防ぐ目的があったのだろう。

また、お父様には別の思惑もあったようです。

幼いころから婚約者と一緒にいることで、恋愛感情をお互い持たせよう、ひいては少しばかりでも幸せな（愛し愛される）夫婦にしてあげようという事らしかった。

王族に限らず、貴族社会では当人の意に沿わない、愛のない結婚など溢れ返っていることを考えれば、それは私が彼から受けた数少ない親心だった。夫婦仲のよいとはいえなかったお父様とお母様だったので、父なりに思うところがあったということか。

ただし、私とオーウェンと一緒にいた時間は長かったけれど、結局双方に恋愛感情が生まれたかと言うと、それはなかった。なぜか。私側の事情はさておき、オーウェンについては非常に分かりやすい理由だった。

私はその時の事をよく覚えている。

私とオーウェンが婚約してから5年。私が15歳、オーウェンが1

6歳、ルイーズが14歳のころであった。

この国では女性は14歳で社交界デビューをする。私も14歳の頃、王城で行われた夜会でデビューを果たした。当然、パートナーは婚約者であるオーウェンで、正真正銘王子様であるオーウェンのエスコートは紳士的で素敵ではあったのだけど、トキメキは感じなかった。丁度その頃、私の恋愛観に激震をもたらす事実を知ったばかりだったので、恋愛に対する憧れとか、やる気といったものが根こそぎなくなっていたせいもあったかもしれない。また、婚約者に特別な感情が生まれなかったのはオーウェンも同様であったようで、無事私のデビューが終わった後にお互いの関係が幼馴染から変わることはなかった。

そして、ルイーズのデビュー時のこと。本来のパートナーは幼馴染のアズであったのだが、直前の軍事訓練で足を怪我してしまったため、代わりにオーウェンがパートナーを引き受けた。ラウルがやる、という話もなかったではないが、ラウルがものすごい勢いで辞退したため（この頃のラウルは非常にダンスが下手であったこと、社交界デビューの女性のパートナーとなった男性は必ず一曲はダンスを踊らなければならないことを補足する）、親しい関係にある、将来の義兄となるオーウェンが引き受けてくれた。

もちろんその夜会には私も出席予定だったので、急遽出席予定ではなかった宰相殿にパートナーを依頼し、しぶしぶ受けてもらった。

普通、夜会のパートナーは女性を家からエスコートするものであるが、オーウェンは王子である。警備上の理由から王城を出られないため、少し変則的ではあるが私はいつも王城の一室で夜会の支度をしていた。当然、ルイーズのデビュー時も王城で支度をし、オーウェンと宰相殿の迎えをまっていた。

初めての夜会でパートナーを待つルイーズは、美しかった。その頃はまだ傾国の美女などと呼ばれてはいなかった彼女だけれど、その日初めて薄い金色の髪をアップにまとめ、色香の漂ううなじを披露した姿は、ほんとうに美しかった。髪を上げ、うなじを晒すのは大人の女性のみ許されたスタイルで、社交界デビューの際はそのような髪型をするのが常であったのだが、今日の夜会で何人の男性がこの子に陥落するのだろうと、楽しみ半分、ルイーズへの心配半分でいた。悪い虫は全て私を取り除くのだ。

それにしても：

「ルイーズ、本当に綺麗。可愛い。ううん、やっぱり綺麗！」

「お姉様、褒めすぎです。恥ずかしいわ」

そう言うてはにかむ妹の姿がまた可愛らしい。

今はルイーズと二人きりのため、いつもの無愛想はなりを潜めもてる力全てを出し切ってルイーズを褒めちぎる。

「お姉様も、その青いドレス、とってもお似合いで、お綺麗です。こうしてみると、お姉様はお母様に本当によく似ていらっしゃるわ」

確かに私は年を経るごとにお母様に似てきている気がしなくもない。髪の色も、ルイーズより少し濃い金髪はお母様とそっくりだ。といっても瞳の色は私はお父様と同じ深い緑で薄い青だったお母様の瞳とは似ていない。何よりお母様は笑顔の印象が強かったため、多くの人から無愛想と揶揄される私とお母様を似ている、という人は稀だ。ルイーズだって髪の色こそ薄いものの、瞳は青みの強い色でお母様よりだし、何より美しさでいったら明らかにルイーズのほうがお母様よりである。まあ、ルイーズの中のお母様像は家に掛かっているお母様の肖像が元になっていて、それがまた私によく似てい

るからそうに思うのだろう。

実際のお母様は、あの肖像画よりもっと美しかったし、やっぱりルイーズのほうがよく似ていると思うのだけれど。

「そうかしら？まあ、私の事はいいのよ。今日の主役は、ルイーズ、貴女なんだから。私のドレスを褒める暇があったら、自分のドレス姿に見とれてなさい」

「お姉様ったら…」

ふふっとわらうルイーズ。もう、本当に、可愛い。そしてドレスが良く似合っている。

「でも、ありがとうございます。このドレス、本当に素敵。流石お姉様だわ。私はともかく、このドレスは自信を持って披露できます！」

「バカね、貴女が着ているからこそそのドレスよ？自分ごと、自信を持ちなさい」

「…お姉様、大好き」

私も、貴女が大好きよ、ルイーズ。

彼女の今日の装いは、私が布からデザインから選び抜き、首輪や髪飾りといった小物も全て私が揃え、正に会心の出来だった。本来そのような役目は母親が担うのだけど、私たちの母親は既に故人だったため、私がその任を負ったのだ。

白く丸みを帯び始めた身体を、薄桃色の薄い生地を何枚も重ねた花びらのようなドレスが覆っている。足元に行くほど布の重なりが多くなり、腰元から足元まで綺麗なグラデーションが出来ている。胸元は下半身と比べればシンプルではあるが、近寄ってみると金糸で

小さな花と、それに複雑に絡み合うような蔦が縫い取つてある。

またドレスの背中を結ぶ紐は複雑な結び方をされており、身分の高い大人の女性にのみ許された結び方をしている。

腕を丸々出すスタイルは近年の流行であるが、ルーズはそれを恥ずかしがったため、ドレスと同じ素材の、ほとんど白に近いうす桃色のストールを羽織らせてある。もちろんそのストールにも胸元と同じ花と蔦の意匠を施し、端には真珠の飾り付けがしてある。

正に美女。いや、まだ可愛らしさの残る姿だけど、数年後には絶世の美女になるう事は間違いない。

その出来栄えに淑女として失格ではあるがニヤつきが抑えられない。いつもの無愛想な顔はどこへ行ったのかと自分でも驚くほどだ。

（本当に、よくやったわ、私）

だてに半年前から準備をしたわけでない。

間違いなく今夜の夜会の主役はルーズだ。

この美しい妹を誰より愛している自覚のあった私は、夜会が始まる前から鼻高々だった。

そう。

目の前の扉が開くまでは、間違いないく私が彼女を誰よりも愛している自信があった。

野望はいかにして生まれたかー婚約者1ー（後書き）

幼馴染は上から順番に

宰相殿	22歳
アズ	17歳
ラウル	16歳
オーウェン	16歳
レイラ	15歳
ルイーズ	14歳

となっています。（ルイーズ社交界デビュー当時）

野望はいかにして生まれたか―婚約者2―

ルイズの社交界デビューの支度をすっかり終え、オーウェンと宰相殿（この頃は宰相殿ではなかったれど）の迎えを待っていた。

と、その時、侍女がパートナーたちの到来を知らせたので、部屋に迎え入れるように言う。

さて、いつも元気で女性へのほめ言葉は「綺麗だ」意外のレパートリーのない婚約者様は、大人の女性へと変身した美しい妹になんと言ってくれるのかしら？

また、久しく妹に会っていない年の離れた幼馴染は、美しく成長した妹を見てあのよく回る口からどんな褒め言葉をだすのかしら。

想像するだに楽しい。

そして扉は開かれた。

最初、オーウェンは扉近くに立っていた私を見つけ、微笑みかけようとした。が、そのすぐ後ろに立っていたルイズを目にした瞬間、動きを止めた。手足の動きを止め、瞳を動かさず、瞬きすらしなかった。

「オーウェン？…オーウェン！」

「っ！」

あんまりにも動かない婚約者を前に、耳元で大きな声で呼ぶと、現実に戻ってきたようだ。

ただし、あくまでも目はレイラから離れないようだった。

「なあに、そんなにルイーズが可愛くて美しくって見とれちゃうかしら？うふふ、褒めるなら私も褒めてよね！なんといってもルイーズの魅力を最大限に引き出してるあのドレス、私が選んだんだから！…ちよつと、オーウェン？聞いてる？」

「あ？あ、ああ…」

この男、私の可愛い妹をみて「あ」しか言わないってどういうことかしら。

まあ気持ちはわかるけど。

一方、普段はもう一人の彼はというと、

「見違えたようだよ、ルイーズ。久しぶりに会ったと思ったら、こんなに素敵なお嬢さんになっていたとはね」

ギースウィル、略してギースは、いつもの通り良く回る口でルイーズを褒めていた。

「なあにそれ。月並みなみな褒め言葉ね。貴方の無駄に良く回る口を、こんなときこそ全力で使うべきでしょう？まったく使えない男ね」

「おいレイラ、それはちよつと言いきすぎじゃないのか。大体な、俺の口はやたら滅多に女性に褒め言葉を口にしないんだよ」

「あれで？あれでそうなの？つまり私にいつも言ってるような「綺麗になったな」とか「魅力的だ」とか「殿下の婚約者にしとくのが惜しいくらいだ」とかは標準装備ってこと？！怖っ、怖いわ！！あなたそれでよくヒギンズ兄様の事とやかく言えたものね？！」

「いやだから、俺はだな…」

「大体そうならそうで、もっとルイーズを言うことがあるでしょう？月の女神もかくや、とか星より美しい、とかまさに…」

「まさに、傾国の、美女…だな」

と、私の言葉を継ぐようにオーウェンが言った。どうやらまともに動き始めたらしい。

後になって思えば、ルイズの事を傾国の美女、と私の前で始めていったのは、オーウェンだった気がする。

「そう！そうそう、そうでしょ？！オーウェンわかってるじゃない。そこの女ったらしも見習いなさいよ」

「だれがたらしだ、この無愛想め」

「ああら、今の私のどこが無愛想なのかしら？ルイズを思っでとまらないこのニヤつきを収めて欲しいくらいなのだけど？」

「ではがんばってその笑顔を夜会まで続けてもらいたいものだな？」

それは多分無理だとわかっているのに、聞かなかったことにする。

「に、してもオーウェン。私のデビューの時には『綺麗だな』としか言えなかったのに、ほんと成長したわね」

「からかうな。いやでも、ほんと、…綺麗だ」

そういつて、見たこともない熱い瞳でオーウェンはルイズを見つめていた。

「ありがとうございます、オーウェン様」

「…いつも言っているだろう、オーウェンでいい」

「でも」

「オーウェンと呼べ。これからは。いいな」

「は、はい」

「呼べ」

「え？」

「名前。呼んでみる」

褒められたことに照れるルイーズに畳み掛けるように名前を呼ぶように言うオーウェン。確かに彼は幼馴染には名前を呼び捨てされることを望んでおり、このやり取りもいつもの事であった。のだが。

「…オーウェン？」

「よし！」

そういつて笑うオーウェンの笑顔は、いつも私が見ているものとは、少し違うように感じた。

このときの私は感じた違和感違和感は、夜会中も、その後の日々も、ずっと続いていた。

今、その場面に立ち会えば、すぐにわかっただろう。

オーウェンがルイーズを見つめる笑顔は、瞳は、恋する男のものだということ。

そして、その後、頻繁に私に会いに来るようになったオーウェンの目当ては、実はルイーズであったこと。

また、いつからか、ルイーズがオーウェンを見る瞳も、熱いものへと変わっていったこと。

だが実際に、私が二人の秘めた思いに気付くのは、それから半年後、ルイーズの誕生日の事だった。

野望はいかにして生まれたかー婚約者2ー（後書き）

宰相殿の本名…ギースウエル・ルウ・イーリス（侯爵家）

知力のイースター家の傍系で、家柄としてはルイーズたちにやや劣るものの、早い段階から頭角を現していたため、王子以下幼馴染グループに投入された。

野望はいかにして生まれたか―婚約者3―

ルイーズが15歳になる誕生日。

私はまたしても張り切って彼女のドレスを選んだ。

半年前の社交界デビュー時は夜会だけだったが、今回は昼間に昼食会も行うのだ。

まだ社交界デビューをしていないルイーズの友達もいたため、お父様にそのようにしてもらった。

と、言うわけで、今回選んだのドレスはは昼と夜の装い、2種類。

テーマとしては、昼は健康的な美、夜は大人の色香といったところかしら。

昼は明るい黄色のシフォン素材、夜は身体のラインをちょっと意識した濃い緑のビロードで作ってもらい、装飾も昼は生花を中心に、夜は蠟燭の光でより輝く宝石を中心にまとめた。

（我ながら、今回もいい出来だわ）

昼の会を終え、夜の装いに着替えたルイーズを思い出し、またにやる。

今は夜会の途中で、ルイーズは会場から少し席を外しているようだった。

そういえば、と思います。

半年前の夜会那时的、オーウェンの見とれっぷりだったらなかった。

結局あの時傾国の美女、だなんて彼らしくない褒め言葉を控えの侍女が聞いていたらしく、それ以来ルイーズへの賞賛の言葉に用いられることが増えた。

半年前から登城するとかならず顔を出していたオーウェンも、ルイーズを見ては熱心に話しかけ、パーティーに来たがっていたが、彼は腐っても王子である。よほどの理由がない限り、王城から出られないため、盛大なプレゼントを我が家に届けるにとどまっていた。

あの時あれだけルイーズに見とれていたオーウェンに、今回の装いを見せれないことは同じルイーズ愛好家(?)としては残念な限りだ。

「久しぶりだな、レイラ。相変わらず表情が死んでるぞ」

「あら、ヒギンズ兄様、失礼ね」

溢れ出る色気を隠そうともしないこの色男は、ラウルの兄のヒギンズだ。私たち幼馴染一団とは年は離れているが、既に仕官している彼は登城して勉強していた私たちに構ってくれることも多く、兄様と読んでいた。

私よりも10年上のこの幼馴染の兄は、しかし私と同世代の女性から私の母の年代の女性まで幅広く浮名を流す、ある意味危険な男である。

いくら兄と慕う男とはいえ、ルイーズがこんな男の毒がに掛かっては目も当てられない。このところ外交官として国外に赴くことが多いと聞いたヒギンズは、忙しくて来られないだろうと思っていたのだが、宛が外れてしまった。イースター家からはラウルが来るから別に来なくてもいいのに。

表情が死んでる、といわれた無愛想な顔を意識的に不満げにゆがめた。もちろんこういったことは親しいからあえて出来るのだけれど。

「何か、僕が来ることに不満でもありそうな顔だね？ どうせなら笑顔が見たいんだけど」

「いやだわ、不満げだな・ん・て。ただ、最近お忙しいときいたので、来られないものと思ってましたの」

「ま、忙しいのはそうなんだけどね。最近社交界で話題のルイーズの誕生会とあっては、出席しないわけには行かないだろう？ 本当に綺麗になったものだ」

来なくてもよかったのにつ。ルイーズに手を出すんじゃないでしょうね？！

そんな私の腹のうちを見透かしてか、またクスツと笑い、それに、と続けるヒギンズ。

「ラウルがどうしても来れない、というから、それもあって都合をつけて来たんだよ」

「え？ ラウル、来ていませんか？」

「今日来ているご令嬢の中に、昨日振られた相手がいるようだよ。いちいちそんな事を気にしているような性格では文官なんぞ勤まらん、といってやったんだけどねえ」

「なるほど」

惚れっぽいラウルはよく告白しては玉碎している。決してラウルの見目や、中身が悪いわけでない。ただ、彼が惚れるあいてはことごとく彼の兄、ヒギンズの毒牙掛かって、ヒギンズに惹かれているのだ。

「兄様もほどほどにしないと、いつかラウルから刺されますわよ」
今度は意識的でなく、自然な笑顔で忠告した。

それに対し、ふむ、と検分するような視線を向ける兄様。

「いやあ、レイラも綺麗になったね。兄様は今感動している。うん、そうやって笑っていたほうが素敵だよ。ほんとうに、麗しい姉妹でうらやましいよ。ま、ラウルにはせいぜい気をつけるとするよ。」

後で一曲踊ろうか、とのお誘いに、私も他のご令嬢から刺されるのは嫌ですから、と笑って答え、その場は分かれた。相変わらず兄様の口は女性を口説くためについている。

「おい」

「はい?!」

気配なく背後に立たれ、肩をつかまれた。

驚いて勢いよく後ろを振り返ると、ギースがいた。

「なによ、ギースか。驚かさないで、」

「ヒギンスのやつ、変な事いつてなかったか?」

「兄様? 変な事? : いつももの通りだったけど?」

「:」

「何よ」

どこなく不服そうなギースの表情。

「まあ、あれだ。あいつはいつもああいったことを不特定多数の女性に言っているわけだから、あまり本気に取るなよ」

「わかってるわよ。兄様の言葉がリップサービスかどうかわからない」
大体、あのルイーズを妹に持つ私よ? ルイーズに近寄りたいって男性の数々のお世辞を受けて育った私が、いくら兄様といえどそのことばを本気で取ったりしないわよ。

「それにね、私、自分の容姿が男性のどう写るかくらい分かっている。そうやすやすとおだてに乗ったりできないわ」

これはちよつと悲しいかもしれない。でも、しょうがない。事実だ。所詮私は平均よりほんのちよつとばかり可愛いだけの(それも雰囲気美人の域を出ない程度の)容姿なのだ。

今でもルイーズは私をお母様に似ている、といってくれるけど、そ

れはやはり髪の色や、あの大分私よりの表情で描かれた肖像のせいに過ぎないと分かっている。

「いや、あのな、お前はほんとにわかってるのか？」

「はいはいご心配どうも。それより」

兄様の背中を捜す。

私に断られたからと言って、次はルイーズを誘うのではないでしょうね、と思ったのだ。幸い、彼は別のご令嬢に声を掛けられていた。一安心である。

その流れでルイーズを探すが、

(…まだ、席をはずしているのかしら?)

お手洗いにしては長い。

ドレスの締め付けがきつ過ぎて、苦しくなっているのかしら…? 少し心配になり、まだ後ろでなにやらごちゃごちゃいっているギースをおいて、探しに行くことにした。

(ルイーズ…?)

ルイーズの部屋の明かりが、扉の隙間から漏れていた。部屋に戻っていたと分かり、安心する。とともに、早く会場に戻らねば流石に中座時間が長すぎると少々お小言を言うことにした。甘やかしてばかりではルイーズにとって良くない。気合を入れて扉に手を掛ける、その寸前。

「オーウェンっ！」

え？

「ルーズ、いいかげん分かってくれ。いや、本当は分かっているんだろう？俺の、気持ちを」

「だめ、やめて。貴方の相手は」

「わかってる！それでも、これは、これだけは…」

「だめよ、オーウェン。それはもらえない。もらえないの…」

隙間からみえる、よく知る二人の姿。

私の愛する妹と、

私の将来の夫。

何？何が起きているの？

隙間からわずかに見えるオーウェンの手元には、白いリボンが握られていた。

この国で、男性が女性に白いリボンを渡すこと。それは、

「お願いだ。今夜だけ、今だけでいい。このリボンを、…俺の思いを受け取れ」

「オーウェン…」

愛の、告白。

物音を立てずに、細心の注意を払って部屋を離れる。

どうして気付かなかったのか。

半年前のオーウェンの瞳。

ここ最近のルーズの瞳。

それは、あのラウルが様々なご令嬢を見つめる目と同じだったのに。

「そういう、こと、だったのね…」

私は考えなければならぬ。

私がしたいこと、すべきこと。

妹の事。婚約者の事。

先ほど見た光景で、何を思った？

私は、どうしたい？

どうすれば。

「考えなきゃ、いけないわ」

あの愛しい妹が幸せになる方法を。

野望はいかにして生まれたか―女の嫉妬1―

私がお父様からオーウェンとの婚約を聞かされた後。

当然の事ながら、婚約の事はあつというに貴族社会のみならず、庶民の間でも広まった。

そしてそれと同時に、私に対する嫌がらせも始まった。

それはかなり長いこと続いた。

「あら、申し訳ございません」

ドンッ！という音ともに、私は城の中庭の小さな池に落とされた。相手はさる侯爵家のご令嬢だ。濃い赤毛が、きつく巻いていたことを覚えている。

「大丈夫ですか？嫌だわ、公爵家のご令嬢が池の水に濡れる打なんで…」

「みて、髪に藻がついているわ。汚らしい…」

「あら汚いだなんて。レイラ様に失礼よ？」

「でもほら、見て。レイラ様、何とも感じておられないようよ？いつもと同じ、あの無愛想な顔」

赤毛の令嬢が言う。すると他の二人はなにがおかしいのか、晒いな

がらそうねえ、でも、という。

「殿下やヒギンズ様、アズ様の前ではよくお笑いになるそうよお？」

「まあ、殿方のまえでは私たちとは違いますのねえ」

「ただの殿方ではありませんわ。素敵な殿方、ですわ」

ヒギンズ兄様の名前が出たことから、この間のルイーズの誕生会にこの子達が来ていた事が伺える。

（親しい方の前でなら、男性だろうと女性だろうと表情が豊かになるのは普通じゃないのかしら？）

そう思っても口には出さない。代わりに、別の言葉を投げかけた。

「池に落ちたこと、気になさらないで。私、城にはよく来るものだから、着替えもいくらでもあるもの」

そう言って彼女たちの言う無愛想な顔を向け、髪についているという藻を彼女たちの足元に放り投げた。今日のドレスは気に入っていたから、このくらいはやってもいいはず。

きやあっ！という可愛くもない叫び声を見無視し、城内へ戻ろうとする私の背中に、赤毛の令嬢が声を飛ばす。

「なによ…貴女なんて公爵家というだけで殿下の婚約者になっただけなのに！私だって、私が公爵家に生まれていれば！」

はあ。

ため息がもれる。もう何度目だろう、こての手の嫌がらせにこの口上。

「なぜなんのとりえもない貴女なの？せめて、妹なら良かったのに……！」

これも最近の決まり文句のようなものらしい。

ルイーズの社交界デビューからこちら、あの愛らしくも美しい妹の容姿を引き換えに私を罵ることが増えた。まあ、ルイーズが相手なら自分が負けない、とは言えないものね。彼女たちの気持ちも少し分かる。

とはいっても、ここで何を言い返しても何かが変わるわけではない。私は彼女を一瞥すると、宣言どおり城内の私室のようなものに帰った。

「またですか？！レイラ様、いい加減キルウエスト公か、殿下か、ギースウィル様でもいいです。せめてこのような事が起こっていることぐらい、申し上げた方が……」

「いいのよ、セラ。言ったところで彼女たちの気持ちが変わるわけではないんだもの」

「気持ちは変わらなくとも、少なくとも態度は変わります。未来の王妃にこのような事、」

「ほんとにいいの。気にしていないから。それよりも聞いて！今度のルイーズの社交界デビューの意匠なんだけど」

につこりと、無愛想な顔に意識して笑顔を浮かべ、セラをみる。納得したわけではないのだろうけど、態度の変わらない私に諦め、セラは首を振って私を着替えさせ、話を聞いてくれた。

私はこの一連の嫌がらせに対して、もはや誰にも、何も言う気はなかった。セラには気付かれてしまったけれど、他の誰かには決して知られまいと、心に決めていた。

誰が悪いわけでもない。強いて言うのなら、婚約を決めたお父様と、

それを唯々諾々と受けた私が悪いのだから。

王子の婚約者として幼い頃から特に登城して勉強や作法を学ぶことが多かった私は、同世代の女の子が通うスクールに顔を出すことは少なかった。故に、同世代の友達もほばいない。

私が王子の婚約者となった10歳のとき。はじめに受けた洗礼は、久しぶりに行ったスクールでの学友だと思っていた子達からの無視。ときどき、辛らつな言葉。たまに、かるい暴力。とてつもないものでもないけれど

理由は簡単で、最初はただの嫉妬だったんだと思う。大して親しくもない、たまにスクールに顔を出す家柄しか取り柄のない女の子が、将来の王妃、つまりこの国の全ての女性の頂点に立つのだ。しかもその相手である王子は、非常に端正な顔をしている。

私はあまり感じないが、確かにオーウェンは非常に整った顔をしている。信念のこもった二重で切れ長な瞳、高いはな、快活に笑う口元。勉強はいまいちだけど、剣や馬術の腕はあり、武力でならしている。

サウズスト家の子供たちにも引けを取らない。

そんな王子が、自分たちよりちよつと身分が高いという理由で、婚約者選ばれたのだ。

（実際はもっといろんな理由や勢力争いの結果で婚約者の座が決まったはずだけど）

それは面白くなかったに違いない。

それに対して私の反応はというと、正直に言えばどうでもいいと思っていた。その頃の私の世界はとても狭くて、愛する妹と仲のいい幼馴染、ちよっと怖いけど優しいお父様で出来ていた。特に妹ルイズへの溺愛っぷりは今から思い出してもちよっと異常だったかもしれない。

5歳の頃頃お母様をなくして、私も小さかったけれどルイズはもっと小さかった。毎日のように泣いていたルイズを抱いてあやした時、不意になきやんでそれはもう可愛い笑顔で私に笑いかけた彼女を見たとき、私が守らなくちゃと思った。

そう思うことで、私もお母様の死から立ち直ろうとしていたんだと思う。

そんなわけでルイズは可愛いし幼馴染たちは優しいし勉強は大変だし、で、スクールの子達からの嫌がらせなどたいして気にしていなかったし、そもそも彼女たちに興味がなかったのだ。

それがよくなかったのか、嫌がらせはどんどんエスカレートしていった。

一度だけ、反応してみたことがある。どうしてこんなことをするのかと。しかし彼女たちの返答は要領を得ないものだったし、それ以降嫌がらせがひどくなったので、反応したことが間違いだっと思った。彼女たちへは、極力無反応とするのが一番良いのだと思った。所詮子供のすることだし、何せ彼女たちと会うことすら少なかったため、気にせず時間は過ぎていった。

野望はいかにして生まれたか―女の嫉妬2―

それはルイーズの社交界デビューを3ヵ月後に控えた、15歳のあの日のことだった。

久しぶりにスクールへと顔を出した私は、もう5年にも及ぶ嫌がらせをうけ、それをいつものように無視していた。授業が終わり、そういう日は時間差でルイーズもスクールに来ていたことを思い出し、愛しい妹の姿を見るため、彼女のクラスへと顔を出すことにした。

ルイーズのクラスは私のクラスとは大分離れている。私が授業を追え、彼女のクラスへ顔を出す頃には、彼女のクラスの授業もとつくに終えていたので、もしかしたらもういないのかもしれない、と思いつきながらクラスを除いた。そこには。

「なんとかわいいなさいよ」

「貴女のお姉様、将来は王妃様になるのよね。私いやだわ、あんな無愛想で、可愛くもない方が王妃だなんて」

「貴女のお姉様でしょう？ ちよつとは貴女のその可愛らしさ、分けてあげたらいいかが？」

「あらダメよ、この子から可愛さを取ったら何が残るといふの？」

「それもそうねえ」

キヤハハハハと品なく笑う彼女たち。その中心で、何も言い返さず俯いているのは、

「ルイーズ！ ！！」

「お、姉、さま……？」

私の姿を認めたたん、青い顔になるルイーズ。

「聞いてらしたの…?」

泣きそうな、つらそうな顔のルイーズ。

それで分かった。分かってしまった。今までにも似たようなことがあったこと。そのたびに、私のせいでルイーズまでバカにされていたこと。恐らく私の立場を思って、何も言い返せなかったルイーズのこと。そして今回彼女たちの罵りを私が聞いたことで、私が傷ついているのではないかと心配していること。

「ルイーズ、私は、何も感じてはいないは。そのような子達の言うこと、聞いてはだめよ? さ、帰りましょう。今日は、私の部屋で一緒にお茶しましょう?」

勤めて優しく見えるであろう笑顔でルイーズに話しかける。その笑顔から、私が傷ついていないと分かってくれたのか、すこしほっとした顔でうなづくルイーズ。

「あ、あの、レイラ様…、今の話を…」

「…」

ルイーズへ向けた笑顔から一転、彼女たちが無愛想、という顔で、そちらを一瞥する。

そして一言だけ、返した。

「私、ルイーズのことのなら、いくらでも怒れるのよ。知っていらして?」

とたん蒼白になる彼女たちを無視して、ルイズの手を引いて帰る。

「お姉様……！彼女たちは……」

「ルイズ。貴女がいくらやさしくても、彼女たちをかばうなんてばかっているわ。私は、貴女をいじめていた彼女たちを、許せないの！」

「お姉様！」

その夜、私は怒りに任せてスクールであったことをお父様に告げた。ルイズが私のせいでいじめられていた事、そうなった経緯として、私がこれまで受けてきた嫌がらせの事。私の事はどうでもいい、ルイズがいじめられることは許せない、どうにかできないか、という旨を、全て告げた。

お父様は黙って聞いていた。時々、どのような事をされたのか、誰がそのようなことをしたのかを、淡々と聞いてきて、最後に、そうか、とつぶやいた。

次にスクールに行った時、面だって私に嫌がらせしていた女のこのうち、リーダー格だった子がいなかった。たまたま休みなのかしら、とは思わなかった。なぜならその子以外の子が、皆一様に私を恐れるような目でこちらを見ていたから。

そして、こう話しかけてきた。

「い、ごめんなさい。今までの事、本当にごめんなさい！」

いきなり何、というと、彼女たちは口々に早口に言ってきた。

本当はあんなことしたくなかった。

いなくなった彼女が嫌がらせを強要してきた。

悪いと思っていた。

彼女がいらない今では、そんな事絶対しない。

だから、どうか貴女のお父様に言わないで。

もう絶対に何もしないから。

：お父様？お父様が何かしたの？

そうして思い出してみれば、ルイーズへの嫌がらせについてお父様に告げ口したとき、流れて私への嫌がらせについても言ってしまった。聞かれるがままに相手の名前、いなくなった彼女の名前を出してしまった。そして彼女は。

ショックだった。自分の浅はかさが、お父様の残酷さが。消えてしまった彼女を、そこまでにくく思ったことはない。ただ、ルイーズが私のせいでいじめられたことへの憤りのまま、お父様に問われるままに答えただけだった。それで、彼女が、彼女の家が王都から消えるだなんて、思いもしなかったのだ。

自分が生まれた公爵家というものの力を、生々しく思い知ったのは、これがはじめてだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6494s/>

公爵令嬢の密やかで大胆な野望

2011年11月15日07時27分発行